

# 第79回日本学生氷上競技選手権大会で 6年ぶり8度目の優勝!!!!

アイススケート部  
ホッケー部門

神長 聡 君  
(社会心理学科4年)



今年の箱根駅伝では5位入賞という38年ぶりの快挙を成し遂げた陸上競技部長距離部門。その模様はP10、11の通りだが、8区で区間賞に輝いた北島君に、改めて当日のレースを振り返ってもらった。

「区間賞をとれ」。監督の期待や1万mの自己記録に対するプライドやプレッシャーで前半はピロピロしていた。沿道の応援が盛り上がり、後方の車で何かを叫んでいる監督の音がまるで聞こえなかった。しかし歓声がふと途切れた瞬間があった。「追え!」。監督の声が聞こえた途端にスイッチが入った。抜けるだけ抜こうと決めた。襪を繋いで、これで終わった...と思った瞬間、「区間賞だよ」と、周りの人が教えてくれた。

区間賞は第80回大会の三行幸一選手(現・ホンダ)以来3年ぶり。故障が続いて投げやりになったこともあるが、だからこそ「勉強も頑張らなくては」と考え、授業と陸上を両立させてきた、北島君。卒業後も実業団での活躍が楽しみだ。

北島寿典 君  
(コンピュータシミュレーション工学科4年)

陸上競技部  
長距離部門

8区で区間賞!!!



昨年12月、秋のリーグ戦決勝の明治大学戦で、終了2分前に逆転され、惜しくも優勝を逃した。「リードされていた状況から追いついて、気持ちに油断が出たのかも」と神長キャプテンは振り返る。

悔しい思いが残ったが、日本学生氷上競技選手権大会(インカレ)がすぐ迫っていたため、気持ちを切り替えた。「4年生にとって最後の大会だから悔いのないよう楽しんでやろう。決勝まで進んで、絶対明治にリベンジする」と皆で誓い、順調に勝ち進んだ最後の相手は思惑通り明治大学。秋のリーグ戦で決勝戦を経験したことが力となり、宿敵を6対1という大差で下し、6年振り8度目の栄冠を手にした。この勝利を神長君は「部員全員の執念とも言えるチームワークの勝利だ」と分析する。過去6年連続してインカレを征した経験を持つ、冬の王者の今後の活躍に期待!

アジア大会で  
銅メダル獲得!!

須佐勝明 君  
(法律学科4年) **ボクシング部**



今年1年間は関東大学リーグ戦、国体と負け知らずだった。メダル獲得を最大の目標に置いたアジア大会では、フライ級(51kg)に出場し、準決勝に進出。前アジア大会の王者であるタイの選手に惜しくも敗れたものの、国技がボクシングと言われる選手に堂々と立ち向かい、銅メダルを獲得。ボクシング部に国際大会での初のメダルをもたらした。また、その活躍が認められ、アマチュアボクシング界での「2006年度年間最優秀選手」にも選ばれた。

卒業後は自衛隊に進み、2008年北京オリンピックの代表になることを当面の目標に、まずは9月に開催される世界選手権大会と、来年行われるオリンピックアジア予選に備える。「将来的には大学院に進学し、本格的に体育の勉強もしたい」と夢を語った。

アジア選手権で優勝!!

船津友里 さん(写真左)  
(英語コミュニケーション学科4年) **レスリング部**



昨年4月のアジア選手権、8月のインカレでともに48kg級で優勝し、学生としてのレスリング生活を有終の美で終えた。「アジア選手権はレベルが高く、優勝できるとは思っていませんでした。その分、国内の大会は負けられないというプレッシャーにはなりましたね」。インカレは、周囲からすれば優勝して当たり前という大会。内容も伴った優勝が必要だった。「最初は動きが硬かったけど、自分から仕掛けて勝ちたいと思っていたから、第2ラウンドからは積極的な攻めができた」。

レスリング部唯一の女性という状況が大半を占めたが、男子部員の惜しみない協力が心から感謝している。「彼らの助けがなかったら優勝もなかったと思う。一生の財産です」。

英語の教員資格を持つ船津さんは、今後も指導者としてレスリングに携わるつもりだ。「まずは英語をきちんと教えられる『教師』になることが先決ですね」。

長年バッテリーを組んできた2人が最終学年で描いたのは打倒青学。3年時、春・秋季リーグ戦とも青山学院大学との優勝争いにあと一歩で破れたこともあり、今シーズンこそ悲願の優勝を期待された。キャプテンを任された田中君は、その重責を感じながら、チームの結果も残さなければいけないという立場で、様々な感情を抱いてのシーズンだったという。結果的に、春季が3位、秋季が4位と優勝を逃し、大学生生活を終了したが、とても貴重な時間だったと振り返る。「2年の時から正捕手として使ってもらえたことがとてもいい経験になりました。監督には本当に感謝しています」。

リーグ戦や日本代表として各大会に出場した実績を評価され、憧れのプロ入りが決まった2人。ドラフト会見当日、永井君は「楽天はまだ若いチームなので、優勝を狙えるように頑張りたい。今まで培ってきたコントロールの良さや伸びるストレートで勝負したい。身体をつくって球団を代表する選手になるのが目標です」とコメント。また、田中君は「守備力は自分の持っている力を最大限出せば負けない自信はある。長所である肩の強さを発揮できる選手、またキャプテンや選手会長になれる選手を目指します」とプロ野球のキャンプイン直前に語った。2人には、ぜひ開幕1軍の座を勝ち取ってもらいたい。

東北楽天ゴールデン  
イーグルスに  
1位指名で入団  
永井 怜 君(法律学科4年)

**硬式野球部**

中日ドラゴンズに  
希望枠で入団  
アジア大会で銀メダル!  
田中大輔 君(マーケティング学科4年)



浅野 修 君  
(企業法学科4年) **空手道部**

空手道部の目標はどんな大会、どんな時でも、優勝の一文字!今年度は「学年の上下に関係なく、全てにおいて話し合える環境作り」を心がけながら、日々の練習、合宿、試合をこなしてきた。

10月の関東団体戦で優勝候補の帝京大学と接戦の末、大将戦で惜敗した本学は、リベンジを誓った11月の全日本空手道選手権大会・準決勝で、再び帝京大学と対戦。惜しくも敗退したが、この大会で3位になったのは17年振り。「大きな目標“優勝”が見えてきたかも」と主将の浅野君はニヤリ。後輩に期待を繋ぐ。

この4年間を振り返ると、2年時に踏み切った手術をはじめ怪我の連続で、個人のタイトルにはなかなか手が届かなかった寺下君。最終学年となった今年も多くの怪我に見舞われた。しかし、キャプテンとしてインカレや、東日本学生相撲大会での団体戦優勝を目標に据え、練習中はもちろん、日常生活まで気を配った。部員の小さな変化にも注意を払い、良いところは褒めることを身上に、チームワークを重視した。だが、結果はインカレ・東日本とも3位。「本当に悔しかった」。寺下君は、自分達が達成できなかった優勝という二文字を後輩に託し、子どもの時からの夢であった大相撲阿武松部屋への門を叩く。

スタートは3月11日、大阪で行われる春場所の前相撲から。「とにかく上で取れるように最初の1年は徹底的に基礎作りをしたい。夢は1日でも早く関取として土俵に上がること」。

スポ東だより  
特別版

2006  
Special

# 2006年度に輝いた 東洋大学のアスリートたち

今年も多くの運動部が活躍し、私たちに大きな感動を与えてくれた。年間を通じ練習を重ね、試合に向けて調整、本番に挑んできた選手たち。3月で卒業する彼らは4年間切磋琢磨し自己研鑽を積み上げて、練習のつらさ、負けた時の悔しさ、勝った時の喜びなど様々な思いがあったはず。卒業を間近に控えた今、4年間を振り返ってもらった。

**相撲部**



寺下隆浩 君(企業法学科4年)